



からしだね

キリストの受難 カトリック池田教会

2016年
2月号 (513号)

共同宣教司牧：畠 基幸神父・松本 一宏神父
協力司祭：デニス・マックゴワン神父
住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26
TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：
http://www.wombat.zaq.ne.jp/catholic_ikeda/



カトリック伊勢教会（三重県）紹介文は6 ページ

巻頭言	2	ガラスケースの言葉	2
ユールセシリアによるクリスマス会	3	南アフリカより	3
南アフリカのエイズ孤児との交流の 会計報告	4	ドレミの会の餅つき会	5
カトリック伊勢教会	6	聖トマス小崎	7
宝塚黙想の家から	8		

表紙写真 撮影:米花

巻頭言

御聖堂の彫刻

デニス神父

池田教会には彫刻がありますね。イエス様、マリア様、ヨゼフ様それに十字架の道行です。今日の話はいちど20年前に教会新聞に書いたけれど、いま知っている人は少ないでしょう。もういちどお話したいです。

聖堂ができたころ、私は盛岡のいくつかの教会で黙想会を指導しました。そのとき盛岡在住の御婦人の彫刻を見つけましたが、非常によくできていると思いました。欠畑美奈子さんの作品でした。盛岡で見た彼女の「十字架の道行」を、池田教会の新しい聖堂のために製作してもらうことにしました。

そのあとで私が主任司祭になった頃、聖堂の祭壇うしろの壁に十字架はすでにありましたが、キリスト像はなかったのです。アメリカの管区長だったジェームズ・パトリック神父様が来られたときでしたが、ぜひ十字架にイエス様の像をつくってもらいなさい、と言われました。欠畑さんに写真を送って、聖堂の壁に掛けられた十字架にあう彫刻製作を頼んだのです。それが今もある十字架像なのです。

祭壇両サイドには、いまマリア様とヨセフ様の像がありますが、そこにはパウロ神父様がずっと前に仁川のコンベンツァール会ポーランド人ブラザー、ローマンさんに頼んでつくってもらった石膏の像がありました。そのころ、聖マリア幼稚園には鷹野貴美子ちゃんがありました。お姉さんの富美子ちゃんも卒園生でしたが、富美子ちゃんが小学校二年生のときに病気で亡くなったため、富美子ちゃんの記念にとご家族からいただいた寄付で、欠畑さんにマリア像をつくってもらって置き換えました。マリア様の像ができたあと、聖ヨセフ像の製作も欠畑さんに頼んだのです。がっちりした体格で仕事道具を手にした姿にして欲しいと注文し、聖堂の御像がこうしてそろいました。

像を制作してくれた欠畑さんに最近手紙をだしました。返事が来てわかりました。欠畑さんのお母さんは旧姓を船越さんといい、お母さんの弟である船越保武氏は彫刻家です。「長崎の26聖人像」、「原城のダミアノ神父」、「聖セシリア」等々、数多くの作品を製作したそうです。いま挙げた像が立派な写真になって収められた写真集を玄関左手横にある本棚に置きました。すばらしいものです。ぜひ見てください。

2月のガラスケースの言葉

誰かと出会うときには
いつもほほ笑みを浮かべなさい
愛は ほほ笑みから始まります。



(マザー・テレサ)

コールセシリアによるクリスマス会

12月25日



12月25日のクリスマス・ミサ後にカール記念館1階でコーラス・グループであるコールセシリアによるクリスマス会が開かれました。コールセシリアの代表者である本田さんが指揮する清らかな合唱と本田さんの独唱で静かに浮き上がった感覚になり、約50名の参会者による“手遊び”と名付けられたうた遊びに興じながら、お茶とお菓子で主の降誕を祝いました。

南アフリカより

M. K.

池田教会のみなさんが南アフリカの子どもたちのために作って下さったクリスマス・カードが南アフリカの2つの施設に届きました。

一つ目の施設は、私が以前に二年間働いていたエイズ・ホスピス、セント・フランシス・ケアセンターです。ここには、エイズを患う方のホスピスとエイズ孤児が暮らすコテージ、その子たちの中で年齢の高い子が通う院内学級があります。

まだ赤ちゃんの子もいて、クリスマス・カードの意味がよくわからない子もいますが、大きい子がカードの絵を説明してやったり、カードを手に「この絵の天使は私がクリスマス劇でやる“天使2”だ！」と喜んだりする姿が見られました。今回は沢山のカードを作って下さったので、センターに入院している大人の患者さんにもカードを渡すことが出来ました。心のこもったカードは病に向き合う患者さんに勇気と励ましを与えたようで、枕元にカードを飾り、訪れた家族にも見せていたようです。

二つ目の施設、アプラス、はセント・フランシスで育った子どもが学校に通う年齢になった時に移って行く施設で、エイズ孤児でない子どもも暮らす養護施設です。この子どもたちはカードを自分で読め、意味も理解できるので、「日本のお母さんだって！」などと言い合いながら、もらったカードをいつまでも手にしていました。

セント・フランシスでは赤ちゃん同様だった子も十代半ばとなり、教会のみなさんへのお礼のカードを、自分で書けるようになりました。以前カードを送った子どもに個別にカードを作り続けている方のカードは、その子がアプラスを出ていても、スタッフが届けて下さったとのことでした。

ここでも、沢山のカードを作って下さったおかげで、セント・フランシス出身ではない身寄りのない子供たちにもカードを渡すことが出来ました。みなさんのカードは彼らへの素晴らしい「心のプレゼント」になったと思います。

心のこもったカードを本当にありがとうございました。エイズ感染や孤独など、様々なハンディを抱えながら生きる南アフリカの子どもたちのために、どうぞ、これからもお祈りください。



カードを受け取った院内学級の子どもたちがお礼をこめて作った大きなカードを掲げて。

「南アフリカのエイズ孤児との交流」の会計報告

池田教会のチャリティコンサートと川西ソロプチミスト会からお預かりした資金から、2015年に南アフリカのエイズ孤児との交流のために、下記のように支出されましたので報告します。

菓子・小物	1,884
画用紙・インク	2,507
輸送費	2,000
合計	6,391

財務委員会

ドレミの会が新年を「餅つき会」で祝う

ドレミの会は2016年の最初の例会を9日に餅つき会として池田教会のカール記念館でお祝いした。前日の昼にはカール記念館の玄関横には石臼や用意され、玄関から1階ホールまでには2列に敷物が敷かれてキッチンでは16キロのもち米が8つに分けられ、アヅキ餡、黄な粉、胡麻餡、大根、醤油、砂糖などの材料が並べられていた。

9日には昼前からドレミの会の旧メンバーやスタッフ（池田教会信徒と日生中央教会信徒、地域の老若ボランティア）がカール記念館の玄関からホールへの通路の中央に敷かれた2列の敷物の上に、ビニールシートを被せた4つの長机を置き、キッチンではドレミの会のスタッフが大釜でもち米を蒸し、餡類を調理している。午後1時の「餅つき会」の開始時刻前から御堂とカール記念館、司祭館に囲まれた中庭のマリア像の前で餅つきがスタッフによって始まった。

石臼に入った蒸された餅米は杵で突かれ、小麦粉が撒かれた木製トレーに移された餅は小さく千切られ、長机の上で両側から並ぶ6名以上の女性スタッフによって2キロの餅と4種類の食材がまぶされて、皿に盛られて、ホールの4つのテーブルにお茶と一緒に運ばれた柔らかな餅は、明るい笑い声と共にドレミの会のメンバーの小さな口に入っていく。もちろん、ドレミの会メンバーの両親やスタッフ達も餅つきをサポートしながら、まだ暖かい餅を食べ、何やら大きな声で話している。マリア像の前では、若いスタッフが列をなして並んでいたドレミの会の子どもたちが杵を持ち上げるのを順々に手助けている。

ホールでのメンバーの賑やかな会話と音楽が流れ、音楽に合わせてダンス・ステップが始まり、窓際の椅子に座って眺める大人たちも屈託ない会話を楽しみ、笑いが絶えない。杖を用いているが普段よりははずっと身軽に歩いてデニス神父がホールに来られ、畠神父も優しい顔を見せて、暖かく柔らかい餅を口に入れてゆったりと談笑している。

ドレミの会の子どもメンバーと旧メンバー、彼らの両親の総数は30余名、スタッフは忙しそうに動き回るので人数を数えるのは難しいが熟年者と青年を併せて40名になるだろうか、その他にも神父さんたちや新年の挨拶のために来たような旧スタッフはドレミの会のメンバーの笑顔を見、談笑し、餅の御相伴に預かり、いくつもの人だかりを作っている。御相伴に預かるだけの人も10名ぐらゐは居るが、ドレミの会からは快く迎え入れられている。ドレミの会の中心に居るのは0.1%の確率で生まれるハンディーをもった子ども達だが、このようにスタッフでない池田教会の信徒も一緒に居たくなる開かれた共同体となっている。ドレミの会の精神的支柱である「生活共同体ラルシュ」や「共同体信仰と光」の創立者ジャン・バニエをして「貧しい人びとの不安定の真っ只中に、イエスの現存が見えてくる。貧しい人々はイエスを示し、『手伝おう』と（ラルシュへ）やって来た人に、自分自身の貧しさと傷つきやすさを発見させ、同時に、愛する能力、つまり心の愛する力を気付かせてくれ、（中略）、初めてそこに留まることが出来る」と書かせている。重ねてジャン・バニエは次のように書く、「神は子供の中に隠れておられるの

が分かる。貧しい人々は、私たちが福音への導き、変えてくれる。即ち、彼らは教会の宝である」。^注

ドレミの会の主宰者の村嶋伸子さんは「天候にも恵まれ、沢山の方の協力で無事に餅つき大会が終わったことを感謝しています。私は「一人の手」という歌が好きです。一人では何もできないけれど、同じ思いの人が力を合わせれば、素敵なことが実現するから～。早くから嬉々として集まる沢山のハンディーをもった子供たち、その家族の笑顔を見ると、スタッフは疲れも忘れ、神様もそこにおられることを実感するのです」と今回の「餅つき会」を振り返っていた。

注：「コミュニティー、ゆるしと祝祭の場」ジャン・バニエ著、佐藤仁彦訳（一麦出版、2003）

カトリック伊勢教会

住所：三重県伊勢市岡本1-2-1

戦後の混乱期にあった1948年に数名の信徒が教会設立のための祈りを捧げました。この小さな集まりが原動力になって、設立資金の積み立てや京都教区への働きかけが行われ、メリノール宣教会のご尽力が得られることになりました。その結果、1949年12月8日、初代主任司祭ウォルシュ神父様のもと聖トマス小崎を守護聖人と定めて、山田教会が発足し、祝別式が行われました。当時伊勢市は宇治山田市と言われており、その名称をとって名付

けられました。信徒の数はわずか25名でした。1955年に宇治山田市は伊勢市と改称されましたので、教会もこれに合わせて伊勢教会と改められました。教会が整備されていく間の信徒の活躍では愛徳会、レジオマリエが結成されて、布教や救済のための活動が精力的に行われました。信徒が増えるに従って大きな聖堂が必要となりました。共同体みんなの協力で、敷地内の小山を切り開き、聖堂の建設を始め、1962年6月完成、厳粛な献堂式が行われました。これが現在の聖堂となっています。この聖堂は鉄筋コンクリートと木造を組み合わせた建物で、スイスのベトレヘム修道会のフロイラー神父様が設計されました。官庁街の建物の中で、なだらかな勾配を持つ三角屋根が美しく、内部正面には一段高い祭壇があり、その上を照らすライトのサークルがとても印象的です。周囲の壁面には十字架の道行きを描いたステンドグラス14枚が、間を置いてはめ込まれ、美しい光をたたえています。このゆったりと広く、美しい聖堂は当教会信徒の心のよりどころであり、深い祈りの場となっています。巡礼に訪ねられた方は、是非この聖堂で心ゆくまでお祈りの時をお過ごしください。

聖トマス小崎 (カトリック伊勢教会 守護の聖人)

関白秀吉の切支丹禁止令によって、1597年に26人のキリスト者が長崎で十字架の刑に処せられました。この日本における殉教の始まりは、世界の人々の心を強く打ち、1862年ローマ教皇ピオ九世によって聖人の位に上げられました。その中の一人に当時15歳の少年聖トマス小崎がいました。父は弓矢師で聖ミカエル小崎（26聖人）と言い、その子息として共に京都で修道院建設の仕事に携わっておりました。そのかたわら、教理の勉強をし、その進歩と修徳は目覚ましく、立派な説教師になり得る資質を有していたと言われています。後に大阪の修道院で従僕となり、1596年に修道士と共に京都に行き、そこで捕えられました。長崎に送られる旅の途中、広島で母モニカに宛て、実に感動的な遺書を記しています。



「母上様、聖主のお恵みに助けられながらこの手紙を書いています。私たちは長崎で十字架につけられることになっています。どうか私のことも、父上のことも何ひとつ心配なさらないでください。パライソ（天国）で母上様のおいでをお待ち申しています。母上様、臨終の時に、たとえ神父様がいらっしゃらなくても、心の底から罪を痛悔し、イエズス様のお恵みをお願いすれば、救いを全うすることができます。人からどんなことをされようとも忍耐し、すべての人に愛をお示してください。また、2人の弟を異教徒の手にゆだねることがないように、大切に育ててください。」わずか15歳であった少年の信仰の真心あふれるこの遺書は多くの人々の心を打ってやみません。伊勢教会では丘の上に像を建て、敬っています。

「京都教区巡礼指定地紹介」より抜粋

正義が造り出すものは平和であり
正義が生み出すものは
とこしえに安らかな信頼である。

イザヤ書32の17

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会

2月18日(木) 10:00 ~ 15:30 指導：山内十束神父

2月19日(金) 10:00 ~ 15:30 指導：山内十束神父

■四旬節黙想会

2月20日(土)17:00 ~ 21日(日)15:30 指導：山内十束神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84)3111



編集後記

16日のミサ後に懸命に歩かれていたデニス神父様が転ばれて脚を痛められて入院された報せは痛ましい。十分に回復されて、それから安全な場所で寛がれるようにお勧めしたい。教会新聞の「からしだね」を編集していると池田教会の方々の多様な活動に気付かされる。「からしだね」の顔である巻頭言は神父様たちの祈りと信者への期待が飾ることなく顕わにされていて、編集子にとってはすっかり忘れてしまった希望や堪える勇気を思い起こさせてくれる。その上、神父様によって取り上げられる主題とその語り掛け方にはまさに三人三様であり、さらに、そんな多様性を好んで巻頭言の主題にされる神父様が居られるのに感嘆する。一方、毎月開かれる評議会の議事録は決まったことが簡明に書かれていて、閣議決定の布告という感じがする。決定事項から逆に評議員の方々が識別される過程を想像するのは殆ど不可能に近いのは致し方ないのであろう。評議会の中に置かれた常設委員会の活動報告を注意して読むと各委員会が力を入れている活動が何であるかが透けて来るし、教会行事・運営や委員会の企画の報告記事、お知らせ記事（北摂地区合同堅信式関係や信徒傷害見舞金制度、節電・節水・省エネの呼び掛け、日曜学校やドレミの会の夏季キャンプ、練習を重ねた各種のクリスマス会、年間に3度開催される黙想会、月2回は持たれるアルファ・コース、平和旬間上映会、クリスマス・チャリティコンサート等）は具体的に書かれていて、評議会や委員会の方々が何を目標にして日常活動をされているのかを想像するのが編集子の楽しみである。しかし、行事や企画に参加できなかった場合でもその楽しみを「からしだね」は届ける役割を果たしているだろうかと不安に思うこともある。信者個人からの投稿（みことばの分かち合いの体験記、来住神父の新著書紹介、ドレミの会の23年など）も数は多くないが、それらからは筆者とその仲間たちの抱く思いもよらぬ生き方に接して、池田教会にある多様な信仰表現の存在を実感する。そのような多様性のある池田教会の人びとが、効率のみを追い求めるような現代社会で主や人々との交わりにおいて、さまざまな喜びと苦しみを味わっておられるのだらうと推察する。だからこそ、原稿を寄せられた方がたの思いや生き方が読者と共感・共有されるような紙面作り

インマヌエル